

らいぶ **創** つくりえいたー  
**LIVE REATOR**

**NO.25**

2005.6.1

研究広報誌

「意味と内容」が  
ひろがる学びの創造  
互いのまなさが  
共鳴することによって

**CONTENTS**

発刊にあたって 国語教師大村はまさんが遺した詩 - 優劣のかなたに - 」・・・1  
 学校提案 「本年度の研究について」・・・2・3  
 授業研究・・・4  
 教科部紹介・・・4・5・6・7  
 教育研究発表会・・・8

国語教師大村はまさんが遺した詩 - 優劣のかなたに -

和歌山大学教育学部附属小学校校長 **松浦善満**



98歳、大村はまさんが4月17日に永眠されたことは、教育関係者に少なからぬ衝撃を与えている。私などは各種の学力調査から子どもの国語力の向上が叫ばれたので、きっと大村さんの授業実践が見直されるだろうと思っていた矢先のことであり、ショックも大きかった。かつては、教科書や学習指導要領の作成にも関わられた国語教師大村はまさん、昨年までは車椅子で元気に全国各地を講演されていたことが懐かしい。彼女の業績については専門家の解説にゆずることにして、最近読んだ大村はま・苅谷剛彦・夏子著、『教えることの復権』（ちくま新書）では、教師大村を支える三つのリアリズムとして、(1)教師にとって一番の責任は教えることであるという認識。(2)授業目標とそれを実現するための具体的計画の存在。(3)身をもって教える。・・・といった箇所が印象に残っている。

さて、5月にはいって、大村さんが亡くなる直前に一編の詩を遺していたことを読売新聞が紹介していた。それをよみながら「学びひたり、教えひたる」といったところで一瞬こみ上げるものを感じた。この場に再掲させていただくが、この詩は子どもの学習と今後の日本の教育に深い示唆(というよりも警鐘)を与えつつけると思う。

優劣のかなたに

優か劣か

そんなことが話題になる、  
そんなすまのな  
つきつめた姿。

持たせられたものを  
出し切り

生かし切っている、  
そんな姿こそ。

優か劣か、  
自分はいわゆるできる子なのか  
できない子なのか、  
そんなことを

教師も子ども  
しばし忘れて、

学びひたり  
教えひたる、  
そんな世界を見つめてきた。

学びひたり  
教えひたる。

それは 優劣のかなた  
ほんとうに 持っているもの  
授かっているものを出し切って、  
打ち込んで学ぶ。

優劣を論じあい  
気にしあう世界ではない、  
優劣を忘れて

ひたすらな心で ひたすらに励む。

今は できるできないを  
気にしすぎて、  
持っているものが

出し切れていないのではないか。  
授かっているものが  
活かし切れていないのではないか。

成績をつけなければ、  
合格をきめなければ、  
それはそうだとすると

それだけの世界  
教師も子ども

優劣のなかで  
あえていえる。

学びひたり  
教えひたる  
優劣のかなたで

## 本年度の研究について

平成 17 年度研究主題

### 意味と内容」がひろがる学びの創造

— 互いのまなざしが共鳴することによって —



石本 倫章

今年度の研究を説明させていただく前に、まず、今に至るまでの足跡を少しだけ振り返ってみたいと思います。

本校では、これまで『みらいの学習』を中心とした教育構造を立ち上げ、学習全般を「わたしの学習」とし、どの教科・領域でも子ども自らが自発的・自主的に学んでいこうとする学習を築き上げようとしてきました。それは、とても曖昧な“子どもたちの学習へ向かう姿”や、“教室に漂う学習の雰囲気”を「学習文化」として、学級や学校全体で創りあげることを研究の中心としてきたのです。

そして、昨年度から、研究主題『「意味と内容」がひろがる学びの創造』として、より良い「学習文化」の構築を目指しました。子ども一人一人の学びを的確にとらえることで、子ども一人一人の成長が期待できる単元構成をしようとしてきたのです。そこで大切なことは、教師のねがいと子どものみとりであり、そのすり合わせた結果が単元となっていくという考え方でした。

子どもを機軸とした単元構成の大切なところを、教師のねがいと子どものみとりだと一言で述べましたが、そんなに簡単なものではないというのはご存知のことだと思います。我々教師は、単元を構成するときに学習対象・教材への思い入れがあります。それは、子どもたちに学習させる価値と言ってもいいでしょう。学習対象のもつ価値を吟味し、子どもたちに学習させる値打ちがあるかどうかを見極めることで、それを学習していく中で子どもが変容していくだろうというねがいをもつのです。また、変容が期待できるからこそ、つけたい力が明確化されていくと考えるのです。子どものみとりでは、今ある子ども一人一人の姿や様子、力をとらえることだけを行っているわけではありません。もちろんそれは重要なことです。しかし、子どもの今の姿や様子などを的確にとらえたうえで、その子の学びの大きさや方向性（ベクトル）も問題にしたのです。学びの方向までをみとることで単元構成が変わってくることもあります。それは、教師側だけの単元構成ではないからです。みとりを大切にすることによって、子どもの変容の姿を、「追求」から「追究」への変容としてとらえようとしてきました。（詳細は、「本校学校提案」参照）また、子どもの今ある姿や学びのベクトルを「まなざし」として、私たちがそれをみとることを、「共有」という言葉であらわしました。それだけ、子ども一人一人に対応した単元構成を大切にしたいというわけなのです。

そして、今年度、『「意味と内容」がひろがる学びの創造』という研究主題のもとでの 2 年次と

## ★提案★

なります。昨年度の研究をふまえ、今年度は、『互いのまなざしが共鳴することによって』というサブテーマを設定しました。

私たちは、和歌山大学教育学部附属小学校に、より良い「学習文化」を根づかせたいと願って日々子どもたちと向きあっています。(具体的には、研究会等でその空気を感じてください。)

より良い「学習文化」を創っていくために、昨年度は、わたしたちが子どもの「まなざし」をみとることを大切にしてきたというのは前述の通りです。しかし、学級づくりのより良い学習の柱になるものといえば、学級集団であることは言うまでもありません。つまり、子ども同士の関わりを重要視せずに、より良い「学習文化」の構築は不可能に近いと言ってもよいでしょう。

蛇足になるかもしれませんが、「それならばどうして昨年度から研究の柱にしてこなかったのか」というご指摘があると思いますので、本稿の No.19 から抜粋し、説明させていただきます。

個に応じる、教育の世界では簡単につかってしまうことばです。たしかにわたしたちはその真の意味を考え、それぞれの子どもの能力だけでなく、性格、おかれている環境、その子の学ぶスタイル、その子の求めにまで応じ、具現化する実践を展開していこうとしてきました。そこで最も大切なことは、何を願って単元構成をし、また子どもの学びのどこをどのようにみてきたのかということなのです。これを実践研究の着眼点とし研究主題を設定しました。教育の原点に立ち返った“0からのスタート”といってよいでしょう。

つまり、研究の出発点として、教師が子どものなにをみとり、その子の求めに応じた単元構成を重要視してきたのです。今年は、その上にたって、子ども同士の関わりを問題にしようとしています。これは、より良い学習文化を築くうえでの“本丸”だと考えています。だから、サブテーマが「共有」から「共鳴」へかえていったのです。『共鳴』とは、お互いがお互いのことを分かりあえる関係からの進化を目指していると言えます。その子の存在や発言が、まわりの子の変化や成長に関わることで、その子もまた変化・成長できるような子どもどうしの関わりを「共鳴」と考えているのです。私たちは、特に学習の中で、その子に大きな成長の可能性を感じ、子どもたちもまたそれを感じることができます。それが、子どもたちどうしの関係の中でもできていき、自分自身でも認識できることを日々の実践の中で実現させようとしているのです。

子どもどうしの関わりを「共鳴」させていくための具体的な方法については、各教科の提案や授業をご覧いただくとして、学校として意志統一していることは、「カリキュラムの見直し」「単元の見直し・再構築」「授業記録の重視による単元・授業分析の重視」「授業の課題や主発問の吟味」等があげられます。また、教科によっては、見直しに留まらず単元・教材開発をしようとしているところもあります。単元・授業分析は、着目児をもうけ、その子の学びの変容からおこなおうとしています。だから、本時案も子ども(着目児だけではありません)のもっている考えや意見に加えて、子どもどうしの意見の出方や関わり方を予想した座席表指導案(教科によって違いは多少ありますが)にすることが多くなりました。

“百聞は一見に如かず” 本校の学習文化の香りにふれてみてください。  
研究会は、10月29日 土曜日におこないます。お待ちしております。

# 授業研究 教科部★紹介

## 国語科

### 初発でつかみ、総合的に読む力を育てる

～関連して伝え合うことによる自己変革を意識させながら～

比較を意識させ、認識力の高まりを目指してきた本校国語科。今年は、新たに「初発でつかむ」を意識させることで、作品全体を見通して読む力の育成を目指します。初発で自分は何を感じるのか、何に気づけるのか。また、友達は何を感じたのか、何に気づいたのか。それはなぜなのか。これまで以上に初発の読みを大切にしたい授業を展開していきます。子どもたちが初発で持った互いの思いを授業の中で関連させながら伝え合う。そこから新たな自分の読みが生まれます。そんな1時間1時間を繰り返しながら自己の変革を感じ、自己の初発の読みを振り返る。そんな学習を展開していきます。



お知らせ

## 夏季公開研修会について

～ 今、教科のあり方が問われています。ともに、研修しませんか？ ～

今、教科のあり方が問われています。それは、学習のとらえが揺れているからです。小学校の学習は、その子が生涯を通して学習していこうとする意欲を喚起することが大きな柱です。教科学習は基礎・基本の定着だけを絶対命題化しているのではありません。本校では、総合的な学習や各教科学習を子どもの側からの学びという視野で研究をすすめてきました。子どもたちは自ら学ぼうとします。それは、本能的といってもいいでしょう。彼らの学びのベクトルを教師がしっかり感じ、より良く導くこと大切にしています。

ぜひ、たくさんの先生方に来ていただき、お越しいただき、たくさんのご意見をお聞かせねがえれば幸いです。今回は、各教科のテーマと内容につきましては、次号に掲載させていただきます。

### 夏季公開研修会

7月28日 木曜日

教科	国語	算数	音楽	家庭	複式
時間	9:30～12:00	9:30～12:00	13:30～16:00	13:30～16:00	13:30～16:00

7月29日 金曜日

教科	生活	理科	体育	社会	図工
時間	9:30～12:00	9:30～12:00	9:30～12:00	13:30～16:00	13:30～16:00



# 教科部★紹介

## 社会科

### ひとり学習の充実からまなざしの共鳴へ

社会科の全体学習を充実させるために、ひとり学習を大切にしたいと考えています。社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受けとめ追究していくことが大事だと考えています。全体学習の中で友達の考えを聞き、自分の思いを出し合う中での“まなざしの共鳴”を目指しています。そんな願いを持ちながら子どもたちと楽しく厳しく学習していきたいと思っています。がんばります！



山崎 立也

北島 健司  
副校長

田中いずみ

片桐 宏

“ネタ！ネタ！ネタ！ネタはどこかいなあ～。” 社会科はネタが勝負！寿司の様な新鮮で活きのよいネタが次々と出てこないかなあ。今日もネタ探しに奮闘中のメンバーです。

## 生活科 「自分らしさを発揮し主体的にかかわる子どもを育てる生活科の学習」

子どもたちが学習に没頭し、真剣に物事に打ち込み、はしゃいだり、首を傾げたり、いい顔で笑ったりする時。また、全身で生きてることを表現しているなって思える豊かな表情が見られる時。子どもたちは満足・成就感で満たされているのではないのでしょうか。

そのために「対象に意欲的にかかわる子ども」「活動や体験を実感する子ども」「よさを発揮できる子ども」の3つを、“めざす子どもの姿”ととらえ学習単元を構成し、実践を行っていききたいと思います。



辻本 郁夫

## 算数科

### 子どもがつなげる算数科学習 ～ 思考の相互作用によって ～

算数科では、昨年度に引き続き「つなげる」ということばをキーワードに取り組んでいます。学習のなかでは、いろいろな「つなげる」場面がみられます。〔考えと操作〕〔自分の考えと友だちの考え〕

〔単元と単元〕〔学習と生活〕など。一人一人の思いや考えを大切にするとともに、互いの考えを交流し、相互に作用しあうことで、「子どもたちは自らで学習をつなげていくであろう。そして、そのことにより共に学ぶ楽しさを味わうことができるであろう。」と考えています。研究会等で交流できればと思います。(写真左より、池田彦男、梅本優子、宇田智津)



# 教科部★紹介

『感動』体験を通して、問題を解決する過程を楽しむ子どもを育てる



私たちの考える『感動』とは…

自然事象に出合って「なぜだろう」「どうしてかな」「ふしぎだな」という疑問、「すごいな」「知らなかった」という驚き、「うまくいった」「やっとできた」という達成、「なるほど」「わかったぞ」という納得 - を感じることである。

『感動』体験をテーマにして2年目の今年は、子どもたちが『感動』を体験するためにはどのような単元を構成すればよいのか、単元導入の工夫、学習形態の工夫、二次情報(映像、模型など)の有効的な利用法、などからアプローチしていきます。そして、これらを通して、問題解決のプロセスを楽しむ子どもたちを育てたいと思います。

「理科が大好き！」と目を輝かせる子どもたちでいっぱいの学校を目指しています！

## 音楽科 「見る・聴く・愛する」力を育てる！

“音”を通して、直接子どもたちに働きかけるのが音楽科の特長です。研究テーマ「鑑賞指導の充実を通して、『見る・聴く・愛する』力を子どもに育てる」の3年目となります。鑑賞教材の量的拡大をもとに、将来に生きる音楽の基礎的・基本的な力の定着をめざします。実践研究における大学との密接な連携はもとより、子どもの育ちを中心に据えた中学校との連携を探っていきます。

本年度はとくに「ことば」に着目した音楽科教育のあり方を追究します。

研究の成果は、子どもの育ちで勝負することをめざします。



江田 司

## 図画工作科 「もてる力を発揮し、心地よさを味わう図工科学習」

子どもが心を開き、一人一人がもっている思いや願いをふくらませ、具体的な形に表すために、自分らしい表現方法や色合いなどをつくり出す心地よさを味わう学習。

自分の思いや願いを表現できた喜びや満足感を仲間に出し、受け入れられることで感じる心地よさを味わう学習。

今年度、図工科はそんな学習をめざします。



北山成美 西井恵美子

# 教科部★紹介

## 家庭科

自らの生活を実感し 工夫する楽しさを味わう子どもを育てる家庭科学習  
～自分のテーマをもって対象にはたらきかける子どもの姿をめざして～



藤原 ゆうこ

子どもがそれぞれもつ課題を明確にすること。学びと生活のつながりに気づくこと。自分らしく創意工夫を凝らして対象にはたらきかけること。これらの姿を大切にした家庭科学習をめざします。

今年度は、生活を見なおすことからスタートし、「食」に関わる領域では朝食作り・おやつ作りをします。「被服」に関わる領域では、布の織り方を調べ、その特徴を生かして生活に役立つ小物作り等の活動を取り入れていきます。

## 体育科

運動の楽しさを真剣に学ぶには  
～ 機能的特性と子どもからみた特性の関係をさぐる ～



石本 倫章 佐々木和哉

今年度、体育科のテーマ・サブテーマを以上のように設定しました。それは、子どもたちに、運動の楽しさを真剣に学んでほしいからです。

体育科は、運動を学ぶ教科です。運動を学ぶとは、その子なりに、運動の楽しさを味わうことであり、そのことが、将来にわたりより良く運動に親しむ態度や意欲を培っていくと考えています。運動の楽しさは不変といってもいいでしょう。しかし、その子にとっては違うかもしれません。子ども一人一人のみとり(子どもからみた特性)と運動特有の楽しさ(機能的特性)の兼ね合いをさぐっていきます。

## 複式教育部

自ら問題意識をもち、かかわりを深めながら学び合う子どもの育成  
～一人ひとりを大切に、互いにひびき合う授業づくり～

複式学級の特性「異学年」、「少人数」をいかして!

複式教育では、子どもたちのかかわって高まるうとする態度や意識を大切に、また一方では、そのための表現力を育成しながら、課題に挑戦し、自分を高め、自分づくりをする子を育てたいと考えています。子どもたちの相互作用が機能的かつ効果的に働くこと(まなざしの共鳴)により、相互学習力も高まってきます。そして、それが自信や学ぶ喜びにつながり、子ども個々が成長すると考えています。



松尾浩一 西村充司 岡田明彦

**第5回複式授業研究会**

研究主題 自ら問題意識をもち、『かかわり』を深めながら、学び合う子どもの育成  
～一人ひとりを大切にし、互いにひびき合う授業づくり～

日 時 平成17年6月17日(金) 10:20～15:30  
日 程

10:20 10:40 11:25 11:40 12:25 13:45 15:30

受付	研究授業	移動	研究授業	昼食	研究協議会(全体会・分科会)
----	------	----	------	----	----------------

研究授業 1・2F:松尾浩一(生活) 5・6F:不野和哉(理科)  
研究授業 3・4F:西村充司(国語) 5・6F:岡田明彦(算数)

**共同研究開発校**

粉河町立 粉河小学校 (松下 裕校長) 田辺市立 田辺第一小学校(中山真一校長)  
橋本市立 西部小学校 (中迫伸次校長) 那智勝浦町立勝浦小学校 (中西克氏校長)  
野上町立 野上小学校 (藤本禎男校長) 和歌山市立 有功東小学校 (武西良和校長)  
美里町立 下神野小学校 (津田修吾校長) 和歌山市立 雑賀小学校 (奥野 順校長)  
美里町立 上神野小学校 (楠友美子校長) 和歌山市立 城北小学校 (山崎光弘校長)  
広川町立 広小学校 (福田正幸校長) 和歌山市立 四箇郷北小学校(辻 民子校長)  
日高川町立川辺西小学校 (川越正博校長) 和歌山市立 広瀬小学校 (貴志節子校長)  
田辺市立 甲斐の川小学校(玉置 績校長)

**研究STAFF**

校 長	松浦 善満	副校長	北島 健司	教 頭	貴志 年秀
1 A	辻本 郁夫	1 B	大谷 真喜子	1 C	西井 恵美子
2 A	石本 倫章	2 B	碓 起代	2 C	北山 成美
3 A	志場 俊之	3 B	宇田 智津	3 C	中井 章博
4 A	上田 恵	4 B	梅本 優子	4 C	山崎 立也
5 A	佐々木和哉	5 B	田中 いずみ	5 C	須佐 宏
6 A	片桐 宏	6 B	藤原 ゆうこ	6 C	辻本 和孝
1・2F	松尾 浩一	3・4F	西村 充司	5・6F	岡田 明彦
音楽専科	江田 司	算数専科	池田 彦男	理科専科	不野 和哉
養 護	上柏 薫				
講 師	浦 聿	佐原 ちづよ	重黒木 弘子		
	川上 友希	藤田 裕子	前川 泰子		
	箕嶋 桂	Ernie Wakefield Elliott	Michael Stephen Sacks		

**From Editors**

5年目に突入した「らいぶ・創りえいたー」  
「生き生きと本物を創り出すひと」という意味  
を込めています。ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

**和歌山大学教育学部附属小学校**

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号  
TEL (073)422-6105  
Fax (073)436-6470  
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>  
E-mail [fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp](mailto:fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp)